

中学生の登校回避感情に対する学級担任の気づきと支援

教育デザインコース 心理学領域

小幡 緑

1. はじめに・目的

平成 28 年度の長期欠席者のうち、不登校を理由とする中学生が約 10 万 3000 人にのぼり、社会的に依然として大きな課題となっている（文部科学省，2016）。森田(1991)は、生徒の「学校に行きたくない」という基礎的な動機感情である登校回避感情の存在に着目した。これまで不登校の前兆行動を教師が把握する視点についての研究はなされてきたが（筒井ら，1998）、前駆状態にある生徒の「学校に行きたくない」という動機感情（登校回避感情）を教師が把握する視点についての研究は不十分であった。

そこで本研究では、中学校教師に対して、登校回避感情を持つと思われる生徒と関わった経験についてインタビュー調査を行い、その経験を構成する要素を体系的に把握することを目的とした。なお、本研究における登校回避感情の定義は「不登校行動の有無に関わらず、生徒が学校に行きたくないと思う気持ち」とした。

2. 方法

2017 年 11 月 2 日～11 月 6 日に、首都圏の国公立中学校に勤務する中学校教諭 8 名を対象に、回想法による 30 分程度の半構造化面接を実施した。質問項目は①「学校に行きたくない」と感じている生徒と関わった経験の有無、②どのような立場でその生徒と関わったか、③いつ・どのような場面でその気持ちを把握したか、④その生徒に対してどのような支援を行ったか、⑤支援の結果生徒がどのように変化したかの 5 項目とした。得られた音声データを逐語化し、大谷(2008, 2011)の SCAT 分析を行った。また、SCAT 分析で得られたテーマ・構成概念の中から、教師が登校回避感情に気づいたきっかけ、行った支援、生徒に見られた変容に関連するテーマ・構成概念のみを抽出し、川喜田(1967)の KJ 法を参考にしたカテゴ

リー分類を行った。

3. 結果

SCAT 分析の結果、生徒の登校回避感情に教師が最初に気づいた場面について、主として〈保護者を介した学校不安の訴え〉〈小学校での担任との関係不和情報の把握〉といった構成概念を含むストーリーラインが得られた。また、登校回避感情が生起した原因を教師がどのように捉えているかの視点について、主として〈生徒自身の社会性の欠如〉〈DV による家庭生活の破綻〉といった構成概念を含むストーリーラインが得られた。さらに、学級担任としての関わりについて主として〈個別対応の継続〉〈良好で安定した関係維持〉といった構成概念を含むストーリーラインが得られた。

また、カテゴリー分類の結果、生徒の登校回避感情に気づいたきっかけとして【友人関係】【適応力不足】をはじめとする 9 つのカテゴリーが生成された。行った支援は【環境づくり】【介入】をはじめとする 4 つのカテゴリーが生成された。生徒の変容では【心理面】【行動面】をはじめとする 4 つのカテゴリーが生成された。

4. 考察

生徒の登校回避感情に教師が最初に気づいた場面では、教師以外からの表明や告知といった「間接的な気づき」がされやすく、教師による発見といった「直接的な気づき」がされにくい可能性が示唆された。また、教師が登校回避感情の原因を生徒自身や家庭に帰属する傾向があるために、個と環境への働きかけを通して登校回避感情を抱く生徒との関係構築・維持をはかろうとする姿勢が見出された。生徒の変容については、ポジティブな変容とネガティブな変容の両者が引き起こされる可能性が示唆された。